特集〈平成五年度大会シンポジウム〉「国学研究の現在」

「新国学」の戦前と戦後
―柳田民俗学と国家との関係―

中村生雄

「新国学談」三部作

まず書誌的な事実として、柳田国男が「新国学談」と銘打って公けにした著書は都合三冊。昭和二十一年十二月の『祭日考』、二十二年六月の『山宮考』、同年十一月の『氏神と氏子』である。いずれも同一書肆の刊行になるもので、三冊ともおなじ造本・装丁であった。また本シリーズについて、『定本柳田国男集』の「年譜」は昭和二十一年一月三十一日の項に、「『新国学談』出版を決意」とうたっている。[1] ただし、このための準備は前年の六月ころから、すなわち『先祖の話』の完成からさして間をおかずに開始されていたのであった。そして、また、年末には『祭日考』が脱稿し、引きつづき寸暇を惜しむように次の『山宮考』が着手されるという具合であった。また第三冊の『氏神と氏子』に収められることになる三つの講演記録のうち、「祭と司祭者」および「敬神と祈願」はそれぞれ昭和十八年と十九年に行なわれたものだから、「年譜」の記すとおり昭和二十一年の初めには「新国学談」の少なくとも三冊分の構想はあらかた固まっていたと見て不都合はない。

ところで、ここで一言しておく必要があると思われるのは、このような柳田による「新国学談」構想がかたちづくられていく過程が、同時にまた日本の国家神道が根元から音をたてて崩れ去っていく時期でもあったということである。周知のとおり、昭和二十年十二月十五日にはGHQから「神道指令」が発せられて、神道と国家との法的、財政的、思想的かかわりの一切が禁止され、さらに翌年一月元旦には天皇の「人間宣言」により、天皇の現人神たることが天皇じしんのことばによって否定されたのであった。こうした大変革をめぐって、当の柳田がどのような感想をもっていたのかはわからない。そもそも『炭焼日記』は昭和二十年年末までで、翌年からの柳田の動静はにわかにつかみがたくなってしまうのである。

しかし、このように国家の敗北が即座に国家神道の解体をもたらし、日本の神社および神職の地位が存亡の危機に見舞われているのをまのあたりにした柳田が、それを拱手傍観できたはずがない。そしてこの時期の柳田の真意を推しはかるものがあるとすれば、それはやはり、彼が全精力を投入して実現しようとした「新国学談」シリーズを措いてほかにはないだろう。とりわけ一月三十一日の「新

国学談」出版の決意じたいが、このような難局を迎えた日本神道にたいする柳田なりの支援策であったことは間違いないし、そのことは、『祭日考』の「窓の燈」で、これから「神社はどうなるだろうか」ということが今や「万人の疑問」となっており、それに答えうる学問が再建されねばならないと言っていたこと、さらにまた、おなじ「窓の燈」の別のところで、

「これからさき神道はどうなって行くか、どうなるのが民族全体のために、最も幸福であろうか、それは微力でただちに決しられないとしても、少なくともそれを考えるのに、どれだけの予備知識を持っていなければならぬか、少なくともその最後の問題に、答えようとするのが自分の最近の仕事であった。[2]」

と言っていることを思い合わせるなら、何なく了解されるところだ。

また暗示的なことに、柳田はこのような救世の書を送り出すにあたっての感懐をたしかめるかのように、『祭日考』冒頭の「解説」を「昭和二十一年紀元節日」の日付を付して書くのであった。国家神道が解体し、天皇の「人間宣言」が行なわれて国家の神聖性が完膚なきまでに剥ぎとられていったこの時期、虚しい形骸と化した紀元節というハレの日を迎えた柳田は、なおもこの国の起源に思いをはせて新著の序文を書いたのだろうか。当時もっとも身近にいた堀一郎が、岳父柳田の学問にははやくから「愛国」の情熱が流れており、なかんずく、

「戦争末期から終戦にわたる学問は、もはや愛国以上の、切端つまった憂国の熱情が、神道研究の上にほとばしった感が深い。しかもそれは、決して単に専門神職のための神道研究、理論や考証の学としての神道研究ではなかった。実に精神的混迷のなかに投げ出されている一般民衆に、自己と民族に内在している価値を見出させ、それに自信と誇りを実証的裏づけをもって与えようと試みた研究であったことは、見遁してはならないように思う。[3]」

と回想しているところを見ると、このころの柳田が日本国家の将来と神道のゆくえを本心から懸念し、しかもその不安動揺が深刻であればあるほど、みずからの学問の新生に賭けた情熱も熾烈であったことを疑うわけにはいかない。

なぜ「新国学」か？

しかしながら、そのような時代の危機に真っ向から対峙するものがもつ率直な情熱といったものが、柳田のことばからはどうにも伝わってこない憾みがある。それは、彼の晦渋でとらえどころのない文体のせいばかりではない。たとえば、ほかならぬ「紀元節日」にしたためられた『祭日考』の序文の最後に、柳田が「新国学談」シリーズの将来について次のような奇妙な予告を行なっているのなどはその例であろう。

「新国学談。筆者晩年の文集は、今後引き続いてこの書名をもって世に公けにする計画である。自分だけは数十巻、百巻にも達する日を夢みているが、現実は多分二、三巻をもって終るであろう。いささか雑誌の体裁を加味したが、以下次号というものをできるならばこしらえまいとしている。ゆえに読者は一巻ごとに、読んでみるか否かをきめることができる。すなわち解説の必要なるゆえんである。[4]」

何はさておき、新シリーズ第一冊の刊行にあたって、その先の見通しを百巻とも二、三巻とも言って人を煙に巻くのは、ずいぶん無責任な言い分ではないか。こう言って柳田は、話をわざとはぐらかしているのか、それとも何か公表をはばかる裏の事情があったのか、ともかく読むものの気持をもてあそぶ文章であることは否定できない。こういう文章に接すると、新しい世の中にたいするメッセージであるはずの「新国学談」シリーズに、柳田本人がどこまで本気だったのかと首をかしげたくなる。

ましてや、いまだ敗戦後の混乱状態を脱し切れず、戦後民俗学の新しい方向など見通しようもない地方の学徒らが、総帥柳田からこんな謎めいたことばを聞かされて途方にくれたであろうことは想像にかたくない。いわんや、この直前で柳田は、「新国学談」シリーズの各冊には「窓の燈」と銘打った「あとがき」的な欄をもうけることに関連して、これを「書斎からの小さな消息である。できる限り自伝風の部分を少なくし、変り行く世相と学問との交渉を、努めてこの窓に映し出そうとしている」[5]と書き、地方学徒にたいする的確な情報提供の必要を認めていたのだから、なおさらであろう。[6]

これらの事実を、いつものような柳田の韜晦趣味と見て横目で読み飛ばしておいていいものかどうか、それとも、岡正雄が柳田の学問を評して「一将功なって万骨枯るの学問」と言ったような、柳田のエリート主義、過剰な指導者意識に由来する根深い現象だと見るべきなのかどうか。[7]

いずれにせよ、柳田がみずからの戦後の学問的スタートを「新国学」の名称のもとに行なうにあたっては、何か及び腰でふっきれない雰囲気がつきまとっている。たとえば、世に言う柳田名彙としての「祖霊」「固有信仰」「常民」、あるいは「海上の道」などのタームは、その概念上の不明確さや時期による意味のズレなど、必ずしも学術用語として問題なきにしもあらずであったけれど、それらのことばを通じて柳田が明らかにしようとしていたものは、十分すぎるほどわれわれに伝わってくる。いわばそこには、一個の日本人として柳田がいだいた、信仰と呼んでもおかしくないような血の通った願望が込められていた。それらの柳田名彙は、よかれ悪しかれ柳田国男という人間と切っても切れない関係にあったのである。

ところが、柳田の言う「新国学」の語からは、そのような切実で人間的な肌ざわりが感じられない。感じられないばかりか、反対にそこには、何かしら納得がいかず、口ごもらざるをえないというような気配がただよっている。そもそも柳田は、自分で「新国学談」と名づけてスタートさせた新シリーズについて、その命名の事情を語るとき、積極的であるどころか、終始、釈明口調になってしまうのだ。実際、『祭日考』の「窓の燈」の欄では最初に「新国学」の見出しをかかげて、本シリーズの命名のいきさつが語られるが、そこでの柳田の語り口はお世辞にも明晰とは言いかねるものである。

まず最初に柳田は、以前、国学院の学生と話をしているときに、「何かの拍子にふと新国学という言葉を使ってみた」と言い、なぜならば、今は江戸時代の「御国学び」のように古典だけに専念していればいいといった時代ではなく、もっと広汎なものが要求されているためだからで、そういう期待を込めて、「一種警句のつもりで」このことばを使ったと述べる。そして、次のようにつづく。

「ちょうどそういう方向へ、彼等の心が動揺していた際であったからだろうか、ひどくこの一語が印象にこびり付いて、たちまち私の携わっている学問の異名が、新国学ででもあるかのごとく、言いふらす者さえ現われた。実をいうと、自分もいささかこの流行を奇貨としたことはある。たしか一ぺんかせいぜい二度ほど、講演の中でこれを用いてみたが、もちろんいい方には気を付けて、それがこちらの専売だといったものと、取られないようにはしていた。そうして心の中では、何も本家本元だというのでないからよかろう。新国学はこれしかないと、主張しさえしなければ失礼であるまいと思ってもみた。（中略）語路さえ悪くないならば新国学の一つ、または一種の新国学とでもいおうかしらんと思いつつも、さすがに気が咎めてその後ふっつりとこの名を口にせぬようにしていた。[8]」

「何かの拍子」といい、また「警句のつもり」というように、柳田はこの語について最初から少々違和感をもち、気が咎めるものがあったことを隠そうとしない。いや、むしろそれを強調しさえして、偶然この語をもちいたことがあったとしても、自分は「新国学」の専門家を自認したわけでもなく、ましてや近年はまったく口にしないのだからとやかく言われる筋合いはない、といった調子なのである。これではまるで、いやいや「新国学」の名称を使ったと言わんばかりではないか。

もっとも、これにつづけて柳田は、次のように言ってはいる。

「ところが今度という今度は、国が新たになったという感じを、少なくとも若い人たちは皆抱こうとしているのである。その新たな国情にふさわしい学問の、これから改めて我々の国土に、茂り栄えるものが、今に現われようと想望している者は、すでに多いにちがいない。[9]」

四

「新国学」は旧式の「御国学び」としての国学につながるのではなく、世の中があらたまった現在、その「新たな国情にふさわしい学問」を意味するのだし、そのような新しい学問にたいする期待は巷にあふれているではないか、というのである。そのあと柳田は、錠前と鍵のたとえをもちいて、そうした新しい学問の特徴を比喩的に語る。持って回った表現で、正確に理解するのがむずかしい比喩であるが、そのあらましは多分こんなところだろう。

すなわち、敗戦によって日本の問題を解く鍵が失われてしまった今、まったく新しい鍵を外国からの受け売りとか翻訳で調達することはできない。やはり日本の過去に精通したものが、これまた過去の学問的遺産を継承しつつ新たな学問を形成していかなければなるまい、――おそらくこういった学問観は、柳田の唱える「一国民俗学」の理念と変わるところがないはずだが、ともあれそう書いたあとで、最後に柳田は以下のように締めくくる。

「こういう事をいっていると、何か私たちの学問までが、もう新国学ではなくなったような気がするが、それはもう致し方がないだろう。しかしともかくも今は国が新しくなろうとしている。この際に当って、人に向って学問の話をしてみようとするのだから、それで新国学談であるという方がよい。新しい国学だからこういう研究を集めて、新国学の談といおうとするのだと、解してもらわぬ方が今は無事でよかろう。[10]」

以上、何とはなし繰り言めいて聞こえる柳田の「新国学談」命名由来をやや丁寧に眺めてきたが、やはり率直に言って、どうしてこれが「新国学」でなければならず、たとえば「新民俗学」や「新日本学」ではいけないのかという理由は判然としない。また、「国」が新しくなろうとしていることに注意を向け、そうした新たな「国」情に相応した学問、という意味合いを強調しようとするなら、「新しい国の学」でも「新生日本の学問」でもよかったではないか。それをわざわざ「新しい国学」と受け取られるのが当たり前の名称をつけたうえで、予想される誤解をまぬかれようと柳田は釈明に必死なのである。

これは決して揚げ足とりでもなければ、ためにする議論でもない。率直に考えて、柳田のこの命名は不自然だし、その不自然さを言いつくろうような彼の釈明はなおさら不自然なのだ。

「一国民俗学」のオートマティズム

誤解されやすい言い方だが、以上見てきたように、戦後になっての柳田の「新国学」という名称にたいするこだわり方には、何かしら異様な、強迫観念めいた過剰反応がちらついている。そこには、押しも押されもせぬ民間学の泰斗・柳田ならではの悠揚せまらぬ自信も感じられず、また博識をもってなる柳田の論理の冴えもない。あるのはただ、かつての「国学」にたいする神経症的な嫌悪感と、新しく生まれつつある「国」への過剰なまでの期待感であるように見える。

ところで、「国」にたいする過剰なまでの期待感と言ったが、これはかつて益田勝実氏が示唆したように[11]、すでに敗戦以前から柳田には戦後の「国」にたいするある種の願望とも言うべき思い入れがあったように思えるからである。それは、敗戦直後の九月に刊行される『村と学童』の「はしがき」を柳田は七月のうちに書いているが、そこで彼が、読者である子どもたちへのメッセージとして、「世が治まり国がますます栄えて行く際に及んで、この大切な知識を人生の役に立て、またはこれを一段と正確なものにして、次の代へ伝えるのも諸君の任務である[12]」と言っていること、また『炭焼日記』の七月二十三日の項には、桑木厳翼への返書に関連して、「我としては希望まことに少なし、しかし国としては別なり[13]」と書いていることなどを念頭に置いてのことだ。このような期待感というものは、おそらく先述した堀一郎の証言にあるような柳田の「愛国」とも「憂国」とも称すべき信念の意識下のあらわれなのであろう。そして間違いないのは、柳田の「国学」への嫌悪と「国」にたいする期待という、一見正反対の姿勢も、じつのところは今しがた見た「国」にたいする無条件の信頼とも言うべき感情の、正反ふたつのベクトルにほかならないだろうということである。

ただ、今はそんなにことを急がず、柳田の国学観を戦前にまでさかのぼって検討しておく必要があるだろう。なぜなら、『祭日考』で説かれるように柳田が終始一貫そのように国学を毛嫌いしていたかというと、必ずしもそうは言えないからである。戦前の一時期、柳田は国学の伝統を積極的に評価し、むしろ国学の伝統をてこにみずから志す学問の基礎的理念を説明することがあったのだ。そしてその一端が、『郷土生活の研究法』にしめされているのであった。

周知のように、昭和十年に刊行された『郷土生活の研究法』は、前年刊の『民間伝承論』と並んで、壮年期の柳田がみずからの学問の方法論的な土台づくりをこころみた代表的著作にほかならない。そして、そうした重要な著作のいずれにおいても、柳田は「新しい国学」に向けての抱負を語っていたのである。それは決して、『祭日考』で言い訳がましく書いているように、「何かの拍子に」「警句のつもりで」言ってみたというような性質のものではなかった。

まず『郷土生活の研究法』だが、本書の前半部分は昭和六年八月に神宮皇学館で、「郷土史の研究法」などの演題のもとに四回にわたって講演したものから成り立っている。内容的には、外国の民俗学研究の実情なども紹介しながら、日本における「郷土研究」の来歴と可能性を論じたものであるが、柳田はその最終章のタイトルを「新たなる国学」として、「郷土研究」の将来的な展望を語ったのであった。念のために断わっておけば、ここで柳田は「新たなる国学」と言っているのであって、『祭日考』でのように「新たなる国の学」と言っているのではないのだ。

さて、ここで柳田が言わんとしている要点はまことに明快率直で、曖昧で含みのある表現など見当らない。まず率直さという点で言えば、柳田は自分がもともと農民史専攻であったにもかかわらず、近年とみに苦悩をましている農村の窮状を眼前にしながら、農民救済のための何の献策もたてられずにいるのは「学徒としてこの上もない恥辱」だと言う。そのような己れの非力を認めたうえで、自分にできることは何かと言えば、これまでの見聞と知識を整理し、まずは農村における教育と道徳の功罪を明らかにすることから始めるしかないが、いずれにせよ最終的には、もっとも痛切な問題、すなわち「何ゆえに農民は貧なりや」という根本問題の解決に向かわねばならない、――そう柳田は明言する。また、なぜそうなのかとの問いにたいする柳田の答えは、自分にとって学問が「実用の僕（しもべ）」であるのは決して恥ではないのだから、というものであった。[14]

このように述べたあと、さらに柳田は「学問救世」という小見出しを立てて、次のように言う。すなわち、現代の農村が陥っている苦しみは物質面だけからでは説明のつかないものが当然あって、そこには古い信仰の名残りが影響しているのだが、これはさらに上代の信仰の問題を度外視しては解決不能の問題なのである。そこに「お国ぶり」の学問が必要になる所以があり、いわゆる国学は本来そのような現実的な課題を内包していた。こうして、しだいに柳田の経世済民的な国学観らしきものが示唆されていくことになる。

「我々の三大人（うし）が出でて道を説かれたまでは、誰一人日本に国学という学問が新たに唱えらるる余地あることを信ずる者がなかった。その国学のひとえに盛んになった時世には、次に第二の新国学の改めて必要を生ずべきことを認める者のなかったのも是非がない。しかし学問が世を救うべきものであるならば、今はまたこの方式のお国学びが入用になってきているのである。つまりは学問に対する世間の注文が新しい時代に入ってまた一つ加わったのである。それは何かと言えば、『人が自ら知らんとする願い』である。我々はぜひともこれに答えなければならぬ。」[15]

一読して明らかなように、柳田はここで国学を語るとき、いささかも口ごもったりはしない。むしろ「三大人」が口火を切って始ま

った国学にはその時代の要求が込められていたのであり、それが今、新しい時代の「世間の注文」に応えるべく「第二の新国学」が要求されているにすぎぬ。それは、学問が救世のためのものである以上、必然事なのであって、目下はそのための新方式の「お国学び」によって、日本人が日本人のことをみずから知り、すすんでみずからを幸福にすることが可能にならなければいけない、というのである。

ちなみにこうした国学観、ひろく言えば学問観は、この時期に柳田がイメージしていた「郷土研究」の理念に通底するものであった。というのは、ほかならぬ『郷土生活の研究法』の最初には次のような簡明な定義がなされていたからである。

「郷土研究の第一義は、手短かに言うならば平民の過去を知ることである。（中略）平民の今までに通って来た路を知るということは、我々平民から言えば自ら知ることであり、すなわち反省である。[16]」

「平民の過去」を知るための郷土研究が、「人が自ら知らんとする願い」に応えるべき新方式の「お国学び」に接続していくことは、柳田にとって自明のことがらであったのだ。しかも西洋諸国などとはちがい、日本人には日本人の過去を知る手立てが身近にそなわっているのだから、そうした広義の「お国学び」こそが現在の知識として不可欠なのだということになる。

「わが個々の郷土には、坐ながらにして自らわが世の過去を明らかにする途があるのである。我々の学問は結局世のため人のためでなくてはならない。すなわち人間生活の未来を幸福に導くための現在の知識であり、現代の不思議を疑ってみて、それを解決させるために過去の知識を必要とするのである。[17]」

このように眺めてくると、『郷土生活の研究法』で唱えられる「郷土研究」が「第二の新国学」という新しい方式の「お国学び」を呼び起こし、それが結局、柳田の例の「一国民俗学」の議論を誘発していく道筋が透けて見えてくるではないか。「一国民俗学」という、柳田の学問の特徴を言い当てているようでいながら、決してその内実がさだかではない呼称についてここで深入りする余裕はないが、一つだけ、柳田が公然と「一国民俗学」の名をあげて、「もう今日となっては大胆僭越と評せられる懸念なしに、この名の新学問が将来日本の土に繁り栄えんことを、祈念しまた希望し得られるようである」と述べたのが昭和七年年初の「食物と心臓」においてであり、[18]またそこで柳田が、前年の昭和六年を回顧し、この年が従来の断片的採集方法を脱して、新たな系統立った観察と記録の方法が全国規模で出現してきた年だと持ち上げ、斯学の将来に祝福を送っていたことを思い出しておこう。念押しするまでもなく、『郷土生活の研究法』の骨子となる神宮皇学館での講義が行なわれたのが、その昭和六年なのであった。

またさらに、昭和八年九月から始まった柳田邸での「民間伝承論」の講義がもとになって翌年には『民間伝承論』が出版され、その第一章として「一国民俗学」の章が据えられることになる。しかも暗示的なことに、その書物の最終頁には新たに勃興しつつある学問の名として、再び「新国学」が名指しされるのであった。

「実際今日は学問上の重要な転換期であって、頼氏の『日本外史』あるいは宣長大人の国学によって、その当時の学問が変化さ

せられたと同じ意味の、重要な学問的転換が、今や要望せられているのである。我々の学問はまさしくこの変転の契機をなすものといえる。これを『新国学』というも憚らぬ、国に必要な新興の学問である。[19]」

この一段は柳田が直接筆をおろした部分ではないが、彼の談話をもとに彼の著作として刊行されたものなのだから、むろんのこと、これが当時の柳田の真意にたがうものだとは考えられない。比喩的に言うなら、ここで柳田は江戸期の国学の隆盛を日本の学問の第一のルネッサンスだと見なし、その近代における再現として今や第二のルネッサンスが幕を開けようとしていると、誇らかに宣言しているのである。

以上のような経緯を踏まえてみると、昭和六年から八年にかけて柳田国男が歩んだ学問的な軌跡は、旧来の「郷土研究」が「第二の新国学」のイメージを触媒にして、最終的に「一国民俗学」へと収斂していくプロセスであったということができないだろうか。おそらく柳田にとって、国学という、ナショナルな心情と学問的実証性とを合わせもった過去の遺産が、このときほど光り輝いて見えたことはなかったろう。

またさかのぼって考えるなら、明治末以来の土俗学的関心が雑誌『郷土研究』によって強固な足場を獲得し、それをさらに近代的な学問研究の場へと飛躍させるべく創刊されたのが雑誌『民族』であったにもかかわらず、そこでは欧米の学問動向に刺激されて異民族研究をめざすエスノロジー的な遠心力と、日本の平民生活の資料報告に重点を置くフォークロア的な求心力との分裂が際立ち、やがて最終的には柳田が同誌の編集から手を引くことで廃刊にいたったという経過があった。昭和初年の柳田を見舞ったそのような苦い経験が、この時期の彼の学問の傾向に少なからざる影を落としていることは想像にかたくないところで、エスノロジー的な研究方法と研究対象とを意識的に捨て去り、あらためて過去の平民の歴史を知るという「郷土研究」をみずからの土俵に選びとった柳田にとって、「国」の過去を探求するという国学の伝統がいかに心強い援軍に見えたことか。そのことは、いくら強調しても強調しすぎることはないだろう。おそらく柳田からすれば、そのような国学の伝統こそが、常民の「自ら知らんとする願い」に応えて、あたかも「坐ながらにして自らわが世の過去を明らかにする途」を提供してくれるように見えたのではなかったか。

言わば、こうした国学のもつ自己完結的なオートマティズムに誘い込まれるようにして、柳田は「一国民俗学」という自閉的な観念のとりこになっていく。そして、そうした自閉的な観念のからくりを象徴的に物語っているのが、例の『民間伝承論』の冒頭に据えられた「序」の文、すなわち文人学者・柳田の面目躍如たる「民間伝承」学マニフェストではなかろうか。

というのは、そこでは「明日の学問」としての「民間伝承論」が一本の稚樹にたとえられて、柳田はその成長をことほぎ、はげますのである。とりわけ注目に値するのは、この学問が三つの種類の方法の協同によって成り立つとされている点で、柳田はそれらおのおのを、「旅人の採集」「寄寓者の採集」「同郷人の採集」と呼ぶ。[20]あまりにも有名な部分だから解説の要もなかろうが、それらが対象とす

るものは順次、生活の外形であり、言語による知識であり、生活の意識であるという。言うまでもなく、旅人による採集は目に見えるものにかぎられた表面的な観察に終わり、寄寓者の採集はことばというコミュニケーションの回路に依存しないわけにいかない。そして最後の同郷人の採集だけが、目にも見えず、ことばにもならない「心」の奥底にまで参入できるというわけである。

子安宣邦氏によれば、この「同郷人」のみがもつ〈内なるものの目〉の特権性によって「一国民俗学」が可能になるのだという。[21] それは、見るものと見られるものの差異と対立が解消された自閉的オートマティズムの世界にほかならない。そして、そうした世界を柳田に保証するのが日本という「国」にほかならなかったのである。

なぜなら柳田はこれら三種類の方法を列記したのちに、次のように言っているからである。

「前の二者とても独立しては完成せず。現に許多の誤解を世に残している。国が「自ら知る」必要は、特に日本のごとき国柄において痛切である。[22]」

『郷土生活の研究法』で柳田は、経世済民の学がめざすところは「人が自ら知らんとする願い」に応えることであると言った。またそのような「願い」は農村の積年の窮状のなかから萌したものであって、農民史を志した柳田にしても、それにたいする有効な手立てを講じえなかったことが悔やまれたのである。農民の願いと学問との乖離、あるいは矛盾がそこではしかと見つめられていた。しかし、今やそれは「国が『自ら知る』」という自閉的なオートマティズムの世界にとってかわられ、「一国民俗学」という、他者を必要としない、あるいは他者を寄せ付けない聖域が登場したのだ。「一国民俗学」なる理念は、「第二の新国学」という近代ルネッサンスの抱負のなかから生み落とされはしたものの、結局はその発生の母胎たる「農村の窮状」から目をそらし、ついには「人が自ら知らんとする願い」をも押し殺すことに手を貸していくだろう。

失敗した「新国学」

見てきたように、昭和六年から八年にかけての柳田学の変貌ぶりは、ありていに言って「国」に突き動かされ、誘い込まれ、挙げ句の果てに自縄自縛に陥っていくプロセスだったと評することができる。またその場合のキーワードが、「新しい国学」であり「第二の国学」にほかならなかった。

だとすれば、柳田が戦後になって『民間伝承論』が「失敗」であったと言ってはばからなかったのと同様、戦前の「新国学」は「失敗」であり、また「一国民俗学」は「失敗」であったと言わざるをえまい。[23] むろん、そのことに柳田が気づかなかったはずはない。気づいていたからこそ、柳田は『祭日考』の「窓の燈」で、神社の行く末について答える資格が誰にもなく、日本人すべての「予言力」はひとしなみに「落第」だと言うほかなかったのである。

しかし一方、柳田の体内に流れる「愛国」というナショナルな心情は、戦前に第二の学問ルネッサンスを待望させたときと同様に、再び「新国学」のキーワードをよみがえらせた。むろん、かつてのルネッサンスは「失敗」し、柳田じしんそれにいたく傷ついたはず

であったから、このキーワードを口ごもらずに言うことはむずかしい。だから、韜晦ともはぐらかしともつかない、真意不明の表現が「窓の燈」の随所に顔を出すのは当然だったと言わねばなるまい。戦後の学問の新たなスタートを、その先頭に立ってみちびいていかねばならぬ宿命を負った柳田は、意気消沈して弱音を吐いてばかりはいられなかったということだろう。

しかし、ときには柳田の口から苦しい胸の内が聞こえてくることもある。たとえば昭和二十一年の十月五日に日本民俗学講座で行なった「現代科学ということ」という講演などがその好例であろう。そこで柳田は、かつての昭和十二年五月から六月にかけ、東北大学において日本の国立大学では初めてとされる「日本民俗学」を講じたころを回想して、次のような反省の弁をもらす。

「時代は我々の生活上の疑問を押え付け、極度にその提出を妨碍している際であった。大きな幾つかの国の問題には、あらかじめ堂々たる答えが準備せられ、人がどういうわけでぜひとも殺し合わねばならぬか、何ゆえに父母妻子を家に残して、死にに行かねばならぬかというような、人生の最も重要な実際問題までが、もう判りきっていることになっていた。第一に自分はそうは考えられぬのだがということが言えない。誰もがそうだからこれには背こうとする者がない。むしろ心の底からその気になってしまって、涙もこぼさずいさぎよく出て行く者が多かった。[24]」

こう柳田は述べて、自分たちの学問の腑甲斐なさをさらけだす。「人が自ら知らんとする願い」にたいして学問が何も答ええず、あまつさえ、そのような願いを知りながら答えを回避していたことを告白して言う。

「白状するならば私はやや遠まわしに、むしろ現世とは縁の薄い方面から、問はいつかは答えになるものだという実例を引いていた。従ってまた気楽な学問もあるものだというような印象ばかり与えて、国の政治上のこれぞという効果は挙げ得なかった。なんぼ年寄りでも、これは確かに臆病な態度であったが、しかし実際またあの頃は今とちがって、ただ片よった解決ばかりあって、国民共同の大きな疑いというものは、まだいっこうに生れてもいなかったのである。[25]」

前節の最後で述べたような、彼の唱えた「一国民俗学」の理念とその歴史上の役割との無惨なまでの分裂を、柳田じしん痛恨の思いを込めてこのように表現する。おそらく柳田が、己れの学問の本質をめぐっての苦衷と煩悶とを、これほどストレートに語った例はほかにないだろう。

とはいうものの、柳田のもの言いからは、自分じしんの「臆病な態度」を率直に認める一方で、「国民共同の大きな疑い」というものが醸成されていなかった時代情況に責任を転嫁しようとする気分が少なからず感じとれる。短兵急だとのそしりを覚悟で言えば、おそらくこのような弁明口調と、それからいくぶんか責任回避の匂いのする自己韜晦的な文体こそが、「学問」と「政治」の人であった柳田に固有の表現であったように思う。そして、そのような柳田国男じしんの人生にたいする基本姿勢を規定しているものはと言えば、若き日の詩人としての己れを放棄し、あまつさえ詩人であった事実さえもみずからの人生の軌跡から消し去ろうとした彼の態度に

象徴されるところの、家長としての、官僚としての、学者としての、あまりにも強烈な目的意志なのであったと思う。

その点、学問の人でありながら同時に詩人でもありつづけた折口信夫とは好対照だ。[26] またそうした二人の対照的なありようは、敗戦時の身の処し方に典型的にしめされている。柳田はすでに敗戦まえから「働かねばならぬ世」を予期し、予期したばかりか敗戦まえから猛然と働き始めたが、折口は降伏の詔勅を聞いてのち四十日間を箱根の山荘に籠り、我が身と日本の行く末について思案をめぐらした。

柳田は、戦後まもなく枢密顧問官になったように、戦前も戦後も一貫して「学問」の人であるとともに「政治」の人であった。在任期間は短かったが枢密顧問官在任中につちかった政界・官界との人脈的なつながりは、その後の彼にたいする社会的評価をいやがうえにも揺るぎないものにしたし、なにより柳田に「天皇の教育がかり」という自負をもたせる機会ともなったのである。官にとどまったときも野に下ったときも、柳田は権力から疎外されたことなど一度たりともなかったように見える。

それにひきかえ折口信夫は、山を下ってのちはもっぱら「信仰」の人になったと言わねばならない。それは折口の「神やぶれたまふ」という敗戦認識にあますところなくしめされており、さらに彼の唱えた「神道の宗教化」「民族教から人類教へ」という独創的宗教論を見れば明白なところで、[27] 折口は、そのいささかはやすぎた昭和二十八年の死まで、「政治」とかかわらないのはむろんのこと、その視線は終始「国」を越えた何ものかに注がれていたと言っていい。

そして、そのような「信仰」の人・折口信夫をつくりあげたものは、間違いなく藤井春洋への贖罪の意識であったはずで、柳田と折口の二人の戦後の生き方を根本的に分かつものもまた、そのような徹底的に私的な贖罪意識の有無にほかならなかったのだと思われる。

註

(1) 『定本柳田国男集』別巻五、筑摩書房、一九八一年、六五一頁。

(2) 柳田国男『祭日考』、『柳田国男全集』第一四巻、ちくま文庫、一九九〇年、三七七頁。

(3) 堀一郎「『新国学談』のころ」、『定本柳田国男集』第一一巻「月報」、一九六九年、七頁。

(4) 柳田国男『祭日考』二五〇頁。

(5) 同、二四九－二五〇頁。

(6) 『祭日考』の「窓の燈」によると、『民間伝承』を復刊するにあたって会員あてに千数百通の相談状を出したところ、そのうち三分の一以上が住所不明で戻ってきたことが嘆かれている（同、三八六－三八七頁）。柳田にとって、当面する課題が全国の学徒に正確な情報を与えることだというのは痛切に自覚されていたはずである。

(7) 岡正雄「柳田国男との出会い」、『異人その他』言叢社、一九七九年、所収、三七九頁。

(8) 柳田国男『祭日考』三七二－三七三頁。

(9) 同、三七三頁。
(10) 同、三七四－三七五頁。
(11) 益田勝実「炭焼き翁と学童」、『文芸読本柳田国男』河出書房新社、一九八三年、所収。
(12) 柳田国男『村と学童』、『柳田国男全集』第二三巻、三七二頁。
(13) 柳田国男『炭焼日記』、『柳田国男全集』第三二巻、四一九頁。
(14) 柳田国男『郷土生活の研究法』、『柳田国男全集』第二八巻、九二－九五頁。
(15) 同、九五頁。
(16) 同、一〇－一一頁。
(17) 同、三〇頁。
(18) 柳田国男『食物と心臓』、『柳田国男全集』第一七巻、三〇三頁。
(19) 柳田国男『民間伝承論』、『柳田国男全集』第二八巻、五〇六頁。

なお、本書は序文と第一章のみが『定本柳田国男集』に収められ、第二章以下は「自筆にあらざる故」に収録されなかった。そればかりか、戦後の柳田は「筆記のさせ方が悪かったので誤りが多い」と言い、本書を「失敗」であったと斥けている（「現代科学ということ」、『柳田国男全集』第二六巻、五六九頁）。しかし大藤時彦によれば、本書には柳田の意向にはずれているところはまずないという（『民間伝承論』伝統と現代社、一九八〇年、「あとがき」二四四頁）。

(20) 柳田国男『民間伝承論』二五三－二五四頁。
(21) 子安宣邦「一国民俗学の成立」、『思想としての20世紀』（『講座現代思想』1）岩波書店、一九九三年、所収。

子安氏によれば、柳田の言う〈固有信仰〉とは、旅人という外部の視線を排し、〈内なる観察者〉という特権的な視線の所有者のみがなしうる「一国民俗学」が語り出した言説にほかならず、そのような特権者による民俗事象の記述は、「ただ心の思いを、軽くは己れの趣向を、重くは己れの祈りを綴っていくものでしかない」という（同、三七七頁）。辛辣にして的確な論評であろう。

(22) 柳田国男『民間伝承論』二五四頁。
(23) 註19参照。
(24) 柳田国男「現代科学ということ」、『柳田国男全集』第二六巻、五七七頁。
(25) 同上。
(26) 筆者はすでに、小論の前段として「新国学」をめぐる柳田国男と折口信夫の関係を、両者の戦争体験のありかたに沿って論じておいたが、紙幅の都合上、ここには掲載できなかった。いずれ明年には、それらを合わせて一書を編む予定である。
(27) 拙稿「折口信夫の戦後天皇論」、『思想』七九七、一九九〇年、参照。

（静岡県立大学教授）